

『支え愛のまちづくり～いま考える社会の「絆」～』

平成24年7月14日 県民ふれあい会館(小ホール)

とっとり県民カレッジ学長、
鳥取県知事

ひら い しん じ
平井 伸 治

昨年の震災以来、特に問われている社会の“絆”。鳥取県が進める「地域の人々のつながりを深め、安心して暮らせるふるさとづくり」の取組について語る。



失われつつある 日本の絆

今日は絆、そして「支え愛」についてお話したいと思います。この「支え愛」は、“合い”の字をあえて“ラブ”にしています。支えて、そして愛情を示す、そういう温かみのある地域社会を目指して、鳥取県独自の活動として展開しようとしています。

日本は災害列島で、支え合っていかなければいけない宿命にあると思います。最近、それに気付かされたのは東日本大震災でした。鳥取県でも豪雪がありました。あの時も鳥取県民の心意気として、支え愛の情を示した瞬間でもあったのではないかと思います。

世代間で交流する機会がだんだんなくなってきています。実は家族の中もそうで、今、急速に核家族化どころか単身世帯化が広がっています。鳥取県内もそうです。コミュニケーションは、脳の働きを助ける大切な要因です。支え愛の絆づくりは、社会の中で失われていく大切な機能やサポート体制を補うだけでなく、子どもが社会

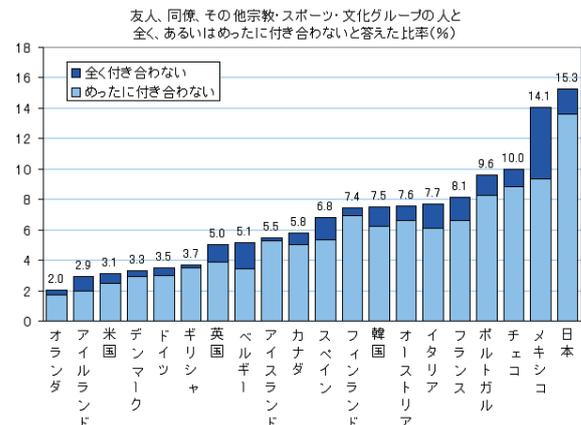
に協調するスキルを向上させたり、お年寄りの認知症を防止するなど、一人一人の住民の健康づくりや成長力を高めるといふ大切な働きがあります。

全国的にたった1人で亡くなる孤独死をされる方が年々増えています。無縁社会という言葉が昨今急にクローズアップされるようになりました。鳥取県は、コミュニケーション全体としてお互いに把握し得る状況にあると思いますが、絆が薄くなってきたというものは皆様に感じていただけないかと思

います。日本はとても心優しく温かい国だと言われています。しかし、OECD（経済協力開発機構）の絆が失われている度合いを示したものは、先進諸国の中で、最も日本で社会的孤立が深まっているというデータが出ています。これはいろいろな見方があるが、逆に

▶ OECD諸国の中でもっとも絆が失われている日本人

社会的孤立の状況(OECD諸国の比較)



(出所) 社会実情データ図録

(注) 原資料は世界価値観調査1999-2002。英国はグレートブリテンのみ。

(資料) Society at a Glance: OECD Social Indicators - 2005 Edition

言えば、それぞれの世帯の自立度が高いことの裏返しでもありません。ただ、分析してみますと、私の解釈ですが、欧米やヨーロッパなどのキリスト教世界では教会に1つのコミュニティがありますから、絆が失われている度合いを示す数字が落ちてきます。また、欧米などではNPO活動やボランティア活動などが結構発達しています。地縁社会だった日本は、地域の中で濃密に助け合っています。しかし、地縁社会がだんだん低下してきて、それを補うかのよ

うに老人クラブやスポーツのサークル活動、趣味の活動などのいろいろな社会的組織も生まれてきていますが、まだ十分に補い切れるまでに成長していない段階です。ですが、決してメンタリティーとして助け合わない国民性では絶対にはないと思います。

支え愛で絆を深める

東日本大震災の時、みんなで助け合おうと日本中から声が上がりました。日本人はそもそも助け合う民族だと思っています。ただ、それをもっと発揮していく必要があるのではないのでしょうか。災害が起こった時だけではなく、私たちが支える絆を深め合うべき時が来たのではないかと思います。鳥取県だったらそれができると思いません。

そこで、支え愛という社会運動を起こしてはどうかと思っています。家族が一番大切という価値観がどんどん上がってきています。悪いことではありませんが、身近な所に人々の興味が全国で集まってきています。地域との付き合いは、かつての半分ぐらいに低下

しています。鳥取県は頑張っていると思いますが、それでも全国的な傾向と同じように、若干その機能が薄れてきています。特に中山間地の奥の方へ行くと、空き家が多く、何軒かまだ住んでいる所は70歳以上の高齢者ばかりという所が増えてきています。どうしてもそういう地域の中での活動が低下せざるを得ない。そうしたら今までとやり方を変えて、もつとその地域の外から助け合うような輪を起こしていかなければいけません。そういうモデルチェンジが求められていると思います。高齢者の單身世帯が鳥取県も非常に勢いで増えています。母子世帯の数も全国で増えていますし、鳥取県でも増えています。このような無縁社会をつくり出す要因は着実に大きくなりつつあります。

震災で絆の大切さが改めて見直されました。鳥取県からも数々の支援の手が差し伸べられました。宮城県の新聞の河北新報の社説に、「鳥取県から一番早く物資が届けられた」と書かれていました。西部地震では全国の方に大変お世話になりましたので「今度は鳥取

県がお支えしたい」という思いで、物資をいち早く送る手だてを講じました。

鳥取県のヘリコプターが石巻で救助活動しました。多くの人を送り込んで避難所の設営などを支えました。感染症が流行り始めた時も、鳥取県から薬を送りました。さらに、ボランティア隊も何台ものバスで向こうに行きました。

昨年の豪雪では大渋滞が発生しましたが、看板屋さんがトイレを貸し、おまんじゅう屋さんがおまんじゅうを車列に配り、琴浦町ではすぐに炊き出しが始まりました。



た。鳥取の県民性が表れたと思います。

災害の中でこそ本当の国民性が表れると思いますし、私たちはそれを大切にしよう一度まちづくりをやり直してもいいのではないかと思います。

幸福度の高い鳥取県

支え愛のシステムはいろいろなやり方があると思います。具体的に見ていきますと、智頭町が最初に行った、郵便局とタイアップしたひまわり運動です。毎日、郵便局員が回る時にお年寄りの困り事や注文を聞いて、それを役場に届ける。地域の資源として郵便局員を使うひまわり運動は、鳥取県発で全国の郵便局に広がりました。いったん郵政民営化で中止になりましたが、先般、鳥取県の中山間地見守り活動に加わってください。また動き始めているところで。全国の郵便局の中でこういう活動を始めたのはまた鳥取県が初めてだそうです。

平成8年から「あいのわ銀行」という地域の支え愛システムをやっています。南部町では約1、



800人の会員がいて、154人が利用しています。持ち点を利用してボランティア協力会員からボランティアをもらうというシステムです。

法政大学の調べで、鳥取県は幸福度が高いというデータが出ました。高齢者1人当たりの社会福祉の予算額が多い、交通事故の発生件数が少ない、保育所がよく整備されている、小児科数が人口に比べて多いことなどが評価されました。さらに一層、鳥取の良さを伸ばしていこうと、鳥取県はこの4月に、去年節約したお金で20億円

を「支え愛基金」として積みました。地域の中には災害時要援護者といわれる高齢者の方や介護が必要な方、障がい者、子どもなどいろいろな方が住んでおられます。災害時のみでなく平常時も支えを必要とする場面はありますし、県

や市町村、社協、NPOなどが一緒にあって、住民が地域の中で支え合っていくことが必要です。声掛けや安否確認など地域の中で支え合って、さらに展開して、訪問介護や共同住宅のような施設を造るなど、地域にいながらにして生活が支援できるシステムをつくりたいと思うています。

広がる「支え愛」のシステム

支え愛の事例です。鳥取市湖山の茶屋二区町内会では、「えんがわ事業」という鳥取大学の学生との交流事業が始まっています。南部町の東西町は高齢者世帯の避難を練習していたので、この間の豪雨災害の時に生かされました。本通り商店街の「すぺーすComodō」は、助け合いの精神で町中に保育所をつくらうという地域運

動です。若桜の「ワーカーズコープゆいまある」は、施設のバスを地域の足としても運行し、庭の草取りや掃除、ふれあいサロンなどを実践しています。

J Aいなばが岩美町で運行している巡回車のはしりになったのは、江府町と日野町辺りを回る「あいきょう号」という走るコンビニエンスストアです。これが全国的に話題になって、鳥取県はこういう買い物支援のメッカになり始めています。倉吉市の「丸山町あつたか見守り隊」は、子どもたちの見守り活動や声掛け活動などをしていきます。

企業と共同した中山間集落の見守り活動は、ここ5年間で51事業者が加わりました。地元新聞社の新聞配達の方が日南町で新聞が溜まっていく家を役場に通報し、その家の方が一命を取りとめたり、鳥取市内で小火を見つけたりしています。移動販売車もこれに加わっていて、いつも買い物に来るお年寄りが出て来ないからおかしいと家に行ってみると、足が痛くて動けなくなっていたということがあったそうです。そのようなこ

とが毎年積み重ねられて、鳥取らしい温かみのある社会活動になってきています。

生活交通は難しい課題で、赤字の路線バスが大変な状況にありますが、なくてはならない社会の足を確保しようと、地域と協力しながら取り組んでいます。例えば、倉吉市の高城地区では、自分たちの車でバス停まで運んでいくサービスを始められています。気高町では過疎地有償運送などもありますし、大山町では電気自動車を用意して病院などに運ぶサービスを始めています。

鳥取力創造運動ということで、市民運動や市民活動、まちづくりなどを応援しています。鳥取市城北では、地域通貨「愛城」を使ってボランティア活動の仲立ちをしています。米子市永江地区は、防災活動や防犯活動のモデル地区に指定されて取り組みを始めました。鳥取市でもいろいろな地区で似たような活動を始めています。子育て王国とつとりもいろいろな政策をやっています。例えば、店でサービスが受けられる「とつとり子育て応援パスポート」は定

着してきました。島根県や関西全
県の広い地域で相互利用が広がっ
ています。ここ5年ぐらいで急速
に子育て施策の充実を図ってきた
ところ、合計特殊出生率が1・58
人に急浮上しました。全国では出
生数が減ってきていますが、鳥取
県は出生数が増えました。少しづ
つ子育て施策が浸透し始めたのか
もしれません。

小さな勇気で 地域を支える

こうした絆をさらに深めていこ
うと鳥取から提案したのが、「あい
サポーター運動」です。障がい
者と健常者が共に生きていくに
は、車椅子の押し方など若干のエ
キケツトが必要です。こういうエ
キケツトを学んでもらって、「あい
サポーター」として登録してい

ただいて、障がい者の方にも安心
して暮らしていただける社会にし
ようと思っています。始めて約2
年半で約7万人が登録していま
す。島根県や広島県にも広がりを見
せ、今では厚労省の審議会の報
告書にも取り上げられるぐらい全
国的にも特徴ある運動になってき

ています。障がい者だけでなく、
認知症サポーターも全国2位のサ
ポーター登録率になっています。

鳥取県は、ボランティアの参加
率が34・5%で全国ナンバーワン
です。災害ボランティア隊も全国
に出掛けていますが、今、学校支
援ボランティアを増やそうとして
います。鳥取県だからできる教育
があると思います。この間倉吉の
学校に行きましたが、運動会のお
手伝いに来られている学校ボラン
ティアの方がおられました。図書
館でもボランティアの方が子ども
たちの指導をしておられました。
保護者だけでなくお年寄りや学校
に通う子どもがいらないご家庭の方
も含めて、地域で学校を支えてい
こうということです。

鳥取市の米里には困り事を助け
るグループ活動があり、江府町で
はいろいろな技能を持った人がボ
ランティア活動をやるうとしてい
ます。倉吉市の「田舎暮らしの応
援団」は、墓守プロジェクトや除
雪、ごみ出しなどのボランティア
活動をやるうとしています。

最近始まった制度として、介護
支援ボランティアがあります。県

が支援している制度で、日南町か
ら始まりました。在宅の高齢者の
お手伝いをするポイントが溜
まって、溜まったポイント相当の
野菜などがもらえます。介護予防
と社会費用の適正化を図った一石
二鳥の効果を狙ったやり方です。
今年度に入って倉吉市でも始まり
ましたし、鳥取市も今、動き始め
ています。

また、いろいろなボランティア
活動ができる人を登録しようと、
「ふくしボランティアバンク」を
創設しました。さらに鳥取県全体
の総合ボランティアバンクをつく
ろうとしています。スーパーパー
ボランティアは、川や道路などの公共
施設を丸ごと地域に預けしましよ
うというもので、鳥取県は全国に
先駆けて導入しています。

砂丘の除草ボランティアは、
観光客のツアーも加わって5、
900人という大変な数になって
きました。豪雪で倒れた松を復活
させようと弓浜半島で白砂青松ボ
ランティアが始まりました。「わ
が町」支え愛活動は、町中の要援
護者情報などを集めて緊急時の助
けができる体制を整えようという

ことで、支え愛基金から10万円の
助成をします。また、琴浦町と伯
耆町でモデル的に、老人クラブが
避難を支援する対策をとっていま
す。江府町でもお年寄りによる消
防団を結成しています。鳥取型地
域生活支援システムモデル事業と
して、高齢者・障がい者等が可能
な限り地域で暮らせる「地域コ
ミュニティホーム事業」、「高齢
者・障がい者の方の居場所づくり
事業」を今年度で始めたところで
す。

アパートやマンションも孤独の
現場になりがちです。県と関係機
関で協定を結んで見守ってはどの
かと向かっています。引きこもり
やニート、児童虐待、DV被害な
どの問題も社会の中にあります。
だからこそ支え愛のまちづくりを
もっと強化していく必要があります。

小さな勇気で、広く地域を支え
ていただきたいと思っています。心温
まる地域社会を、ぜひ皆様の手で
つくっていただきたい。鳥取県が
その先進地になるべく皆様と一緒
に頑張っていきたいと思っています。